

初期レヴィナスにおけるハイデガー批判の構え

Structures of the Early Levinas' Critique of Heidegger

市地 敬典

Keisuke ICHIJI

清風学園 読書・論文指導部

大阪経済法科大学 21世紀社会研究所客員研究員

目 次

1. 実存的権能の孤独——レヴィナスのハイデガー像
2. 「イリヤ」から「時間」へ——レヴィナスの「存在論」
3. ハイデガーの「存在論的差異」について

キーワード：権能、欲望、自我中心性、存在論

フランスのユダヤ人哲学者であるエマニュエル・レヴィナスは、第二次世界大戦前後の時期に練った独自の現象学批判を土台にして、反存在論的他者論を展開した。よく知られるように、そのような他者論を彼は「第一哲学としての倫理」と名づけた。レヴィナス倫理学の哲学的意義と、そして方法的短所とを検討する研究の一部として、このノートを作成する。

ここでの作業の中心は、レヴィナスの初期の著作（特に『時間と他者』）における、ハイデガーの現存在の実存論的分析に対する批判の構成要素を素描することである。はじめに、この批判の骨子が、レヴィナスが「権能」と捉える現存在（人間）の欲望の問題化であることを示したい。そして次に、この問題化が、「存在論的差異」の概念についての強引な解釈をはらんだものであることを明らかにしたい。

1. 実存的権能の孤独——レヴィナスのハイデガー像

一九三〇年代半ばに独自の思索の道に踏み入って以来、レヴィナスの著作の全体は一つのグランド・テーゼに導かれている。それは、存在は「存在しないことよりもよりよい」としても、「悪」ないし「禍悪」であるという命題である¹。こう主張する理由は、レヴィナ

¹ E.レヴィナス（西谷修訳）『実存から実存者へ』ちくま学芸文庫、2005年、9頁&26頁

スにとって自己とそれを取り囲む世界の「存在」は、その本質において「孤独」だからである。「存在」は、レヴィナスにおいて「実存」とほぼ同義と捉えられる。人間の存在は彼の現世での日常的生をめぐる諸事に巻き込まれているが、この生への具体的な関与が彼の世界の見方を形成する。「存在するということは、〈実存すること〉によって孤立することである」²。

ハイデガーは『存在と時間』の中で、現存在としての人間の「実存」を次のように定義する。「この存在者にはおのれの存在においてこの存在自身へとかかわりゆくということが問題である」³。この「実存」の概念にレヴィナスは、自己自身への気遣い（自己関心）の根源性ゆえの人間の自我中心性（エゴイズム）を見ようとする。ここからレヴィナスは、ハイデガーの実存は西洋哲学的な人間理解の根本思考枠を要約するものであると結論づける。そしてこの哲学的に刻印された孤独で悪（mal）なる存在を、「孤独の存在論的根源」にまで溯り、時間の生成を分析することで乗り越える（dépasser）という課題を掲げる⁴。時間は「他の人間との関係」において初めて有意味となる現象である、というのがレヴィナスの発想である。

『時間と他者』では、ハイデガーの哲学が「存在論」であるというレヴィナスの批判は、二つの焦点を持つ。第一にレヴィナスは、ハイデガーによる他者の捉え方が「存在論的には曖昧なものである」と言う⁵。ここで問題化されているのは、ハイデガーの分析では他者は現存在の存在の意味の開示にとって何の重要な役割も与えられておらず、現存在が見せるのは単に「非人称的」な非本来性から孤独な本来性に向かう運動だけだということだ。レヴィナスによれば、ハイデガー的な他者とは、私に見られて構成され、自分自身を気遣う私の孤独な秩序の中で非他者化される存在者でしかない。

第二に、「共存在」として語られるハイデガー的な他者関係は「隣り合わせ」の関係で、「向かい合わせ」（＝対面）ではないとレヴィナスは主張する⁶。この主張が意味するのは、共存在の構造は、人間の自己自身の存在への「繫縛」と「実存」という在り方に関する問題を隠蔽してしまうということである。彼が表現しようとする直感は、この「私的な事実」⁷の隠蔽はハイデガーの存在論だけでなく西洋の哲学的探究のすべてを、実存的権能の孤独とでも呼ぶべき状態に陥らせるというものである。それは、人間の自己同一性と主権性を自閉的な内在の領域で維持すること、そして彼にとって異他的で異質なものをすべて従属させることを正当化するような思考様式を指す。

「時間的なもののなかの存在論」という試論は、初期レヴィナスにおけるハイデガー批判の基本の構えを明確に理解させてくれる。

² E.レヴィナス（原田佳彦訳）『時間と他者』法政大学出版局、1986年、8頁（以下、本書を時間と略記）

³ M.ハイデガー（原佑・渡邊二郎訳）『存在と時間』中央公論社（世界の名著62）、1971年、79頁（以下、本書を存在と略記）

⁴ 時間 6 頁

⁵ 時間 4 頁

⁶ 時間 5 頁

⁷ 時間 5 頁

人間にとって、実存することはその存在可能性に関与する一方法である。「人間とは、彼にとってその存在がつねに問題となるような一存在である。」⁸

ここでは、ハイデガーの実存概念を構成する二つの前提の連関がレヴィナスの批判的である。第一の前提は、人間においては、自己自身の存在——自己の在り方——が最も根底的な関心事となっているということ。第二は、それぞれの人間がこの関心事に関わる本質的な仕方は、「可能性」を通してであるということ。二つの前提の連関のうちにレヴィナスは、人間の自己自身の存在と生への愛着や執心（この存在と生の探求、育み、維持と保存など）がハイデガー的人間を方向づけていることを感じ取る。そしてこの方向づけのゆえに、レヴィナスは「実存」を「自我中心性」と同義であると見做すのだ。

実のところこの試論の大部分を占めるのは、人間の存在に関するハイデガーの研究の哲学的革新性への支持表明である。ハイデガーの基礎的存在論で採用される実存論的アプローチは、事物や観念に対する人間の関係が、第一義的にはもはや対象についての知識を目がける認識でなく、むしろ本質的に自己自身の存在の「了解」であることを理解させる点で優れている。しかし、やや唐突な仕方で、レヴィナスはこの「了解」に対する批判を置く。それは、ハイデガー的な実存における「企投」と時間の理論における「未来の優位」との結びつきへの批判である。

ここでのレヴィナスの主張は、この結びつきは人間の世界と自己自身に対する主観主義的な（もしそう言ってよければ、生-中心主義的な）支配の正当化をもたらすというものである。こうして「存在了解」に関する前半部の評言、「了解、それはわれわれの実存の力能^{ディナミスム}そのもの、自己に対する権能そのものである」⁹は、次のような断言にまで強められる。「未来への脱自それ自体は、無のうちに身を置くことであるとともに一切の人間の権能の源泉である」¹⁰。

レヴィナスはあからさまに現存在を、死を自分自身の存在可能性の地平に従属させることで志向的に把持するものとは描かない。死は現存在に有限性という本質を与えつつ、理解と所有を拒む一つの可能性にとどまるものである。「死への先駆的跳躍、この例外的な存在可能性を決意した了解が想定しているのは、現存在が可能性としての死から出発して自分自身と出会うこと、現存在がこの可能性にとどまりうること、つまり実存しうることである」¹¹。だがレヴィナスは、企投が現存在の構えの最も根源的な部分をにない、その根源性が審問されないならば、ハイデガー的な存在は死を存在可能性の領域に引き入れ、そして自閉的で他性を欠いた仕方で自己の実存を全的に肯定する権能を、潜在的に人間に保持させるという問題化を執拗に試みる。

⁸ E.レヴィナス（合田正人・内田樹編訳）『超越・外傷・神曲』国文社、1986年、116頁（以下、本書を超越と略記）

⁹ 超越117頁

¹⁰ 超越130頁

¹¹ 超越129頁

ハイデガーの基礎的存在論のうちにレヴィナスが見る西洋的人間性のエゴイズムの更新とは、人間は実存という様式で存在するという発想そのものである。そして、レヴィナスにとって人間の思考と行動をエゴイズムとしての実存、あるいは実存的力の孤独に即して生起させるものは、「権能」である。こうして、実存という求心力を持つ権能をいわば無力化するという課題が、彼のハイデガー批判と「時間と他者」の問いを練る作業との核を形成する。

2. 「イリヤ」から「時間」へ——レヴィナスの「存在論」

レヴィナスの言説の中で「存在論的」性格を持つ部分は、「孤独の存在論的根源にまで遡ること」を目指す。そしてこの企ては、徹頭徹尾、人間の存在の「事実性」をめぐる問題の考察として試みられる。そこでは、何よりもまず私が一人の実存者として在ること、「私の実存すること」という事実の既決性に関心が注がれる。レヴィナスの分析は、自己自身の存在への繫縛を「断ち切る」¹²ための哲学的、心理学的、物理的努力が、この事実の前にすべて無力であることを示す形で展開される。この意味で彼の「存在論的」言説は、人間が人間として在ることの孤独の構造を解明することにささげられている。私がすでに実存者として在るかぎり、この存在の事実を打ち消すことは完全に不可能である。この事実的な救いのなさが、レヴィナスの「存在論的」思索の底板をなす。

「イリヤ」としての存在への接近は、レヴィナス哲学の最も前衛的な構成要素の一つと言える。「イリヤ」という語で彼が表現するのは、「われわれ抜きで、主体抜きで生起するところの〈実存すること〉、実存者なき〈実存すること〉、というような観念」である¹³。この「実存者なき〈実存すること〉」への繫縛を、レヴィナスは「孤独の存在論的根源」と見る。

レヴィナスによれば、「イリヤ」を見出す方法は二つある。一つはすべての存在者の「想像的破壊」、もう一つは「不眠」の分析である。

はじめにレヴィナスは次のことを提案する——「あらゆる事物、存在、人間の無への回帰ということを想像してみることにしよう」¹⁴。次に彼は、この無化の後に残るものはもはや存在者でも無でもなく、むしろ存在者の「不在」であること、そしてまさにこの不在が非人称の「現前」として自らを押しつけてくることを指摘する。このような事態をレヴィナスは「純粋な〈実存すること〉の容赦なさ」と呼ぶ¹⁵。「事物と存在とのこのような破壊の後には、非人称的な〈実存すること〉の『磁場』があるのだ。(中略) もはや何もないときに、否応なく強いられる〈実存すること〉という事実が」¹⁶。「不眠」の分析では、レヴィナスは「何

¹² 時間31頁

¹³ 時間12頁

¹⁴ 時間13頁

¹⁵ 時間14頁

¹⁶ 時間13－4頁

の目的もない覚醒状態」に言及する¹⁷。「不眠」という現象の重要性は、人間の存在の底部に免れがたい受動性、つまり意志に反して強いられる在り方があるということを意識させる点にある。

この分析を通してレヴィナスは、実存的な生にとって根源的なのはハイデガー的な無の可能性との対峙でなく、むしろ無の「不可能性」¹⁸であることを主張する。また、「イリヤ」が意味付与や解釈によって操作を加えられうるものではないことを指摘する。その理由は、「イリヤ」のうちに意味付与すべきものは何もないからである。「イリヤ」は「自殺」によっても消去することはできない¹⁹。無や死といったものは、自発性や自由意志によってつかまれる選択肢などではないのだ。この根源的不可能性は何に由来するか。それは、実存者には実存すること、存在すること以外はできないという事実である。この理由からレヴィナスは、実存の事実性をハイデガーの「被投性」(Geworfenheit)よりも強調して、「遺棄と放棄」、「(実存の……) うちに－投げられて－ある－こと」として解釈するのだ²⁰。

考察の次の段階で、レヴィナスは「位相転換」に言及する。「実存者がそれを通して自らの〈実存すること〉を結びつけるところの出来事を、私は位相転換[hypostase]と呼ぶ」²¹。「位相転換」は、「イリヤ」としての存在のうちに実存者を他者なき孤独に繋ぐ出来事が生じることを指す。重要なのは、時間の観点から見れば位相転換は「現在」であり、〈実存すること〉のうちに時間が生成することの「機能」であるということだ²²。

現在は、一方では、ひとつの出来事であって、未だ何ものかではなく、実存してはいないのであるが、しかし、それによって何ものかが自己から出てくるところの〈実存すること〉という出来事である²³。

現在とは、それ自身は何らかの実体ではないが、時間に向かう運動のきっかけ、つまり「始まりも終りもない、無限の網目に生じた裂けめ」、さらには「自己からの出発〔脱出〕」である²⁴。

だがレヴィナスは急いでつけ加える。「位相転換を現在として措定することは、未だなお、存在のうちに時間を導入することではない」²⁵。我々はここで時間の理論に関する彼の特異な企てに出会うことになる。この特異という印象は、レヴィナスが時間の研究のために開

¹⁷ 時間15頁

¹⁸ 時間17頁

¹⁹ 時間17－8頁

²⁰ 時間12頁

²¹ 時間10頁

²² 時間22頁

²³ 時間22頁

²⁴ 時間21頁

²⁵ 時間21頁

拓する領野が、最初から「現象学の彼方」²⁶であることに由来する。孤独の問題への応答としての彼の研究は、非人称的でのっぺらぼうな〈実存すること〉の内側からの時間の生起を形而上学的に記述するという形をとる。それは「孤独とは、時間の不在ということ」だからだ²⁷。レヴィナスにとって「時間」が意味するものは「〈実存すること〉から実存者への移り行き」²⁸であるが、彼はこの「移り行き」を記述する際、それをもはや経験の人間によって経験可能な生の次元に探し求めない。レヴィナスいわく、「現在なるものを〈実存すること〉に対する実存者の支配として想定し、〈実存すること〉から実存者への移り行きを探求することによって、われわれは、もはや経験とは名づけ得ないような探求の次元に身を置くことになる」²⁹。

研究の出発点において、現存在としての人間が「平均的な漠然とした存在了解内容」を持って「前－存在論的」な日常生活を送っているという「現事実」³⁰を容認しない点で、レヴィナスの時間理論はすでに『存在と時間』におけるハイデガーのそれとは訣別している。レヴィナスの関心は、現存在を非本来的な時間性への「頹落」から自己の「本来性」へと連れ戻すことにはない。彼が意図するのは、実存する人間にとって存在と時間が問題となる以前に、存在あるいは〈実存すること〉そのものにとって時間はいかにして可能なのか、という法外な問いに答えることなのだ。

それゆえレヴィナスの言説においては、「現在」は単に「裂けめ」であって、未だ「未来」に到達してはおらず、「時間」を〈実存すること〉のうちに導入するにはいたらない。「逃走について」という論考での表現を用いるなら、現在は未だ〈実存すること〉を「過－越」(ex-cendence) していないのだ³¹。

レヴィナスによれば、「他の人間」との出会いが「未来」とのつながり、そして時間の成就の条件である。「時間こそ、われわれの他人との関係という出来事そのものとしてわれわれに現れるのであり、また、そうであればこそ、われわれは時間によって、現在なるものの一元論的な位相転換を乗り越える多元論的な実存に到達し得ることになる」³²。ただし重要なのは、「他人との関係」の生起は、〈実存すること〉との一体性という孤独に連れ戻すすべての繫縛の「断ち切り」を要求するという点である。「質量の束縛〔繫縛〕を断ち切ること、それは位相転換の決定性を断ち切ることである」³³。レヴィナス哲学の狙いは、人間を〈実存すること〉そのものから解き放つことである。言い換えれば、存在をやめる（打ち消す）ことは不可能だが、しかし〈実存すること〉（の自我中心性）からは隔てられた在り方

²⁶ 時間24頁

²⁷ 時間31頁

²⁸ 時間24頁

²⁹ 時間24頁

³⁰ 存在71頁

³¹ 超越60頁

³² 時間24頁

³³ 時間31頁

という人間理解を編み出すことである。

3. ハイデガーの「存在論的差異」について

前節でレヴィナスの「存在論的」言説の骨子を描いたが、この言説は読み手に次のような印象を与える。存在そのものがそれ自身からの脱出を欲しており、人間とは存在のこの欲望、あるいは願いが顕在化する場であるという観念がレヴィナスの思索の根底にあるのではないか。他者を求める「存在のドラマ」³⁴をめぐる初期レヴィナスの考察において、実存者としての人間は、まるで存在の自己脱出の運動として「機能」すべき形而上学的任務を担っているかのように映る。そして「時間」の重要性は、「多元論的な実存」に向かった存在の自己自身からの逃走を可能にするところにある。

しかしこの「存在論的」考察は、いくつか的方法的な問題を含んでいるように見える。それらの問題を以下に整理してみる。

1) 〈非人称的で時間を欠いた「イリヤ」のただ中に生じる「位相転換」〉という観念は、これに後続する分析を基礎づけることが難しい。なぜならこの出来事は、人間の日常の具体的経験を検証することを通して確かめることができないものだからだ。「われわれはもちろん、何故そのようなこと[位相転換]が生じるのか、ということの説明することはできない。つまり、^{メタフィジック}形而上学の分野に^{フィジック}物理学は存在しないのだ」³⁵。

2) 「イリヤ」をめぐる形而上学的思索の結果が「事実」として提示される傾向が見られる³⁶。存在が事実として「悪」（あるいは「居心地の悪さ」³⁷）であるとする考え方は、人間の存在に対する嫌悪感覚を必然化し、意味付与あるいは了解としての存在との関係の無力を決定づける試みとも言えるが、この考え方そのものが意味付与の一形態であると捉えることができる。

3) 実存者の〈実存すること〉との孤独な一体性を「断ち切る」というレヴィナスの時間理論の企て——人間の〈実存すること〉そのものからの事実的な「過－越」——は、あまりにも法外であると映る。私見ではこの法外さ、あるいは企てを共有することの難しさの源となるのは、「存在論」は存在一般が織りなすドラマの解明の試みであるという（人間の日常的経験の一部を誇張することに基づく）概念化である。

レヴィナスは、ハイデガーの哲学において個々の人間の存在と生は、存在一般がそれ自

³⁴ 時間 4 頁

³⁵ 時間 20 頁

³⁶ 例えば、時間 14 頁

³⁷ 超越 65 頁

身の「ドラマ」を演じるためのいわば手段となっていると考える。ハイデガーの基礎的存在論は、「同」の内部で「同」を求める存在の運動を探求するもので、「他なるものに向かう存在的真理」に従属させてしまうというわけである。

ここで、存在とは「イリヤ」であるという観念に検討を加えるため、二つの問いを置きたい。(A) 存在への問いに関してハイデガーが「存在論的」な問い方と「存在的」なそれとを区別することの目的は、レヴィナスが考えるように、存在をその純粋な中立性においてあらわにし、その中への人間の脱自的な参与を描くことなのか。(B) ハイデガーの現存在の分析は、人間の唯一性というものを解体し、必然的に「存在の真理」の追究に取り込んでしまうものなのか。

第一の問いに答えるためには、「存在論的差異」の理解をめぐるハイデガーとレヴィナスとの相違を明確にしなければならない。レヴィナスによる「イリヤ」の分析は、純粋存在の恐怖と不快さを明らかにする試みだった。だが、存在を「イリヤ」としてあばくこの仕方は、ハイデガーが存在の探求方法として禁じた「物語」による説明ではないだろうか。

『存在と時間』でハイデガーは次のように述べる。

存在問題を了解するときの哲学的な第一歩は、「イカナルオトギ話ヲモ述ベナイ」という点にある。言いかえれば、あたかも存在が何らかの存在者でもありうるとい性格をもっているかのように、存在者の由来をたどって他の存在者へと還元することによって、存在者を存在者として規定しないという点にある³⁸。

「オトギ話ヲ述ベル」という表現が指すのは、対象化を通じて存在に接近すること、つまり存在を一つの存在者にし、それに意識の側から特徴や属性に関する概念や表象を貼りつけることである。これは「存在的」な存在了解である。ハイデガーがこの了解の仕方を斥けるのは、「オトギ話」が設定された途端、それが人間が現にどんな在り方（存在との関係）をしているかを見えなくさせるからだ。

レヴィナスは「存在論的差異」を、数えたり名づけたりできる可視的な存在者と「動詞」として表すべき存在との区別として理解する³⁹。レヴィナスによれば、基礎的存在論とは存在をその原的な不定形の動詞性において開示する企てである。この企てを彼は自ら遂行する。そして「イリヤ」を見出す。もはや見られる物も見ざる者もない「非人称的な〈実存すること〉の『磁場』」として、「イリヤ」は無ではなく不在の深淵から自身を押しつけてくる。この不在の現前は、匿名で不可視で際限なき出来事だが、死と無との不可能性を決定づけるとされる。ここからレヴィナスは、前述のとおり、「存在は悪である」と結論づける⁴⁰。そしてこの結論は、すべての存在論が、それが人間の認識と実存をこのような存在に

³⁸ 存在72頁

³⁹ 時間11頁

⁴⁰ 時間18頁

繫縛するかぎりにおいて忌まわしいという見方を含む。

レヴィナスの「イリヤ」の言語化はきわめて巧みである。また彼の「イリヤ」の言説は、現代のすみずみまで管理化され平準化された社会システムの中に置かれた人間の状況を、独自の生々しさを表現する。しかし、基礎的存在論の名のもとにハイデガーが意図したと考えることを自ら遂行することによって、レヴィナスは「存在的」に存在の意味を定義するという誤りをおかしている。つまり、不可視の〈実存すること〉を動詞として捉えることは、すでに存在を一種の存在者 (Seiende) に成形すること、そして「存在的」な仕方 で存在を規定することなのだ。

この誤りは、ハイデガー的な「存在論的差異」に対する一つの誤解に由来する。レヴィナスにとって存在論的研究を存在的研究から区別するのは、前者が存在を動詞として扱う点である。しかしハイデガー自身の関心は、存在の問いにおける二つの本質的に異なる問いの様式にあり、二つの異なる考察対象にあるのではない。換言すれば、存在論的差異が表すのは、物理的あるいは経験的な研究領域と形而上学的なそれとの違いではなく、問いの問い方における方法的違いである。

ハイデガーは、人間の具体的な生と、人間にとっての存在を種々の「物語」による説明から解き放つ課題に取り組むために、存在論的差異の重要性を説く。

現存在が存在的に際立っているということは、現存在が存在論的に存在しているということによる⁴¹。

ここでハイデガーが「存在論的」と呼ぶのは人間の「存在様式」 (Seinsart)、つまり実存である。実存を存在論的にするものは、「おのれの存在においてこの存在自身へとかかわりゆくということが問題であること」であり、彼がこの存在へと「これこれしかじかの態度をとることができ、またつねになんらかの仕方 で態度をとっている」ことである⁴²。

どのような意味でこの様式、あるいは在り方は存在論的なのか。それは、さまざまな他の存在者と異なり、現存在は対象化されるだけでなく自ら存在者を対象化し、それらが何であるかという問いを発する唯一の存在者であり、また彼が発する諸々の問いは、彼自身の存在が何であるかという問いをうちに含んでいるということである。ただし、現存在を対象化して、直接その存在を問うことをすれば、その問い方は直ちに存在的となってしまう。それゆえ現存在が何であるかを問うことは、彼が具体的にどのように存在者や世界を対象化しているかを記述し、その記述の中から現存在の「根本機構」をつかみ出すことによって可能となる。

ここで注意すべきことが二つある。一つは、存在を存在論的に研究しようとするなら、存在を直接に対象化・主題化してはならないということである。存在の直接的な対象化・

⁴¹ 存在80頁

⁴² 存在79-80頁

主題化はただちに思考を存在的にしてしまうのだ。もう一つは、存在そのものから人間の存在へというハイデガーの方法的な視線の向け換えは、人間が「意味」を介して自分自身や他の存在者、そして存在者の存在に対して態度をとっているという点に気づかせることである。ハイデガーによれば、現存在の実存論的分析は「前存在論的な存在了解内容の徹底化」⁴³の形で具体化される。このことは存在というものが、いかなる場合も、事実ではなく意味（それが諸々の存在者が事実として立ち現れる「地平」を準備する）として理解されるべきであることを示唆する。人間は存在者に関して、その存在においてそれが何であるかを知ろうとする。ただし、人間は選択的な仕方、より正確には、関心・利害・欲望といったものと運動する「価値評価的」な仕方で行う。人間の在り方の本質を示すのは、この「欲望相関的」な価値評価なのである⁴⁴。人間のこのような存在様式が「存在論的」と捉えられているのだ。そしてそれゆえ、人間の存在が何であるかを問うことは、彼が諸々の存在者を価値評価する具体的な仕方を記述し、それによってこの存在を形づくる「根本機構」を明らかにすることなのである。

「存在論的」という概念に関するレヴィナスの理解が、ハイデガーがもともと意図したものとは大きく異なることを見てきた。初期レヴィナスの哲学的思索の全体を支える命題は、存在は存在しないことよりはよいが悪である、というものだった。彼の「存在論的」言説における一つの根本的特徴は、人間が自分の存在（あるいは実存）を引き受ける際に行う意味付与が、彼の物質的存在への繫縛、あるいは「(実存の……) うちに－投げられて－ある－こと」を乗り越えるには本質的に完全に無力だということを見せることである。この言説の根拠は、存在者の存在（それを把持することを人間は渴望する）が、その純粋な動詞性において引き受けられた途端、災厄的な容赦のなさをもって自己を押しつける巨大な不在の現前の事実であることが明らかとなるということだった。そうしてここから、人間は「居心地の悪さ」という形而上学的情動⁴⁵のうちに宙吊りにされており、それゆえこの人間を「過越」によって救出することが哲学の使命であるという考えが生まれてくる。「新しい道をたどって存在から脱出することが重要なのである」⁴⁶。

しかし問題は、レヴィナスがハイデガーの基礎的存在論を批判する際の推論の根拠——存在は悪である——は、存在から読み取りうる多様な可能的意味の一つだということである。しかもそれは、存在的な仕方、定義された存在の意味であると言えるのだ。

存在への探求を始めるにあたってハイデガーが強調したように、「『存在』とは何のことであるのかを、われわれは知ってはいない」のであり、そしてさらに、「われわれは、そこからその意味を捕捉し確定すべきはずの地平をすら、識別してはいないのである」⁴⁷。この存

⁴³ 存在83頁

⁴⁴ 竹田青嗣『ハイデガー入門』講談社、1995年、43－6頁

⁴⁵ 超越65頁

⁴⁶ 超越83頁

⁴⁷ 存在71頁

在に対する無知の認識から出発し、ハイデガーは、「存在」が何を意味するかという問いに人間が答えることは彼自身の存在（在り方）の了解を構成するものを解明することによって初めて可能となることを明らかにした。これと引き合わせるなら、存在を事実的に悪とするレヴィナスの「存在論的」規定は、ハイデガー存在論の次の方法論的原則からの逸脱であると議論しうる——「現存在は原則的に先行的におのれの存在をめぐらして問いかけるべき存在者としての機能を果たす」⁴⁸。存在論的に見るなら、レヴィナスの先の規定は、存在に対する彼自身の欲望相関的な価値評価であるだろう。そして、この価値評価がまず人間の存在が何であるかを理解するという手続きを経ないかぎり、存在は事実的に悪であるという意味づけや、位相転換という出来事によって人間に存在の自己脱出という課題が与えられるという推論は、その本質において「存在的」、つまり「オトギ話」と見做されるのだ。

⁴⁸ 存在83頁